

日本史

安丸良夫
佐々木潤之介

一

本学における日本史にかかわる教育と研究の濫觴は、東京商業学校および高等商業学校時代の日本商業史の講義に求められよう。もっとも古い記録としては、明治十九年の東京商業学校の授業科目のなかに「商業地理歴史」があり、それは日本商業史を含むはずのものであった。しかし、この時期には、ヨーロッパの商業史がレオン・レヴィ『英国商業史』の日本語訳などを教科書として教えられたのにたいし、日本商業史については教科書もなく、実際には講義されなかったものと思われる。日本商業史の講義がなされるためにはヨーロッパの経済学と経済史についての知識をふまえながら、日本の商業の歴史についての独自の体系化がなされなければならなかったが、東京商業学校の発足時には、まだその課題をになうに応わしい人材を得ることができなかったのである。

しかし、同年の「別科学科課程表」には、「支那歴史ノ大要」「萬国歴史ノ大要」とならんで、「本邦歴史ノ大

要」があり、別科では概説的な日本史の講義がなされていたことを知りうる。その担当者は、同年十二月に赴任した芳川俊雄であつたらう。芳川は、弘化元年、忍藩の藩儒の家に生れ、はじめ漢学を学び、のちに蘭学と英学を学んだ人で、明治二〇年の職員名簿には、「和漢作文地理及歴史科」担当の「雇」として記されている。しかし、芳川が本学に勤務したのはごく短い期間で、そのあと概説的な「歴史」を担当したのは、前橋孝義であつた。前橋は、文久三年に幕臣の家に生れ、小石川同人社で英学を、二松学舎で漢学を学んだ人物で、東京専門学校と山形師範の教員をへて、二十二年に高等商業学校の「雇」となり、ついで助教諭、教授となり、二十七年まで在職した。芳川の講義は、「和漢作文地理及歴史科」担当という職員名簿の記載からも推察しうるように、伝統的な和漢学から十分に自立しないものであり、より若い世代に属する前橋の講義も、伝統的な和漢学に洋学的新知識を混えたものであつたらう。

ところで、東京商業学校と高等商業学校の発足時には、まだ日本商業史の担当者を得られなかつたのであるが、明治二十一年十一月、土子金四郎、菅沼貞風、横井時冬の三人が、内国商業史取調べのために高等商業学校に採用された。土子は、早くからイギリス経済学を学び、本学在勤に先立ってすでに専修学校で経済学関係の講義を担当しており、そのなかには商業史も含まれていた。したがって、右の内国商業史の取調べは、菅沼と横井の日本商業史についての具体的な研究が、欧米の経済学や経済史についての土子の学識を参照しながら、系統づけられたものにまとめられることを期待したものといえよう。しかし、土子はまもなく留学に出発したので、日本商業史の体系化は、まずはじめに菅沼によって、ついで横井によってなされることとなった。つぎにこの二人についてのべよう。

菅沼は、慶応元年、肥前国北松浦郡平戸に平戸藩士の子として生れ、幼名を貞一郎と称した。旧藩士弟のために設けられた猶興書院に学び、明治十四年から北松浦郡役所に勤務した。そのころ、大蔵省関税課に貿易沿革史編纂の計画があり、北松浦郡役所在勤時代の菅沼は、十六・十七世紀の平戸におけるヨーロッパ貿易についての調査を担当した。菅沼の調査は、当時としては根本史料を博搜した画期的なもので、二十一年に『平戸貿易志』として刊行された。十七年、菅沼は猶興書院における勉学が「抜群ノ俊才」と認められて東京遊学を命ぜられ、東京大学に入学、二十二年に古典講習科漢書課を卒業した。東京大学在学中の菅沼は、主として大学所蔵の図書を渉猟したが、それは、『平戸貿易志』編纂の問題意識を発展させて、古代以来の日本貿易史を体系づけるためであった。その成果は、百枚綴り十四冊、三十九万語という大冊の卒業論文『大日本商業史』にまとめられた。『大日本商業史』は、『平戸貿易志』もあわせて、菅沼の死後、明治二十五年に出版された。その前年に編年体の遠藤芳樹『日本商業志』が刊行されていたとはいえず、著者自身が総論冒頭に、「日本には商業の歴史なし。其之を研究して稍や連絡を得せしむるものは、恐くは余が此大日本商業史を始とするならん」と自負するよう、日本商業史をある体系的な構想のもとにまとめあげた最初の労作であった。

本書の特徴は、対外貿易史を中心に行っていることである。すなわち菅沼は、商業には内国貿易と外国貿易があり、外国貿易にはさらに「働掛の貿易」と「受身の貿易」があるという。そして、律令制以前や室町時代から戦国時代にかけての時期のように中央権力が弱体なときには、「働掛の貿易」が活発におこなわれ、中央権力が強化されると、「働掛の貿易」は衰えて「退守」をこととするようになる。叙述の重点が和寇以降、とりわけ十六・七世紀におけるヨーロッパ諸国との交易や、朱印船の海外渡航など日本人の側からの積極的な対

外貿易におかれたことは、こうした立場からして当然であった。本書は、寛永の鎖国をもって筆を止めており、国内商業については、貨幣制度や商業関係の法制などについて部分的に言及しているだけである。しかし、研究方法は、基本史料を博搜し、多くの史料を引用しながら叙述をすすめる実証性の高いもので、いくぶん特殊な視角からとはいえ、わずか数年のあいだに日本商業史を体系化するまでにいたった研鑽ぶりに驚かされる。

右に述べたところからも推察できるように、菅沼の商業史の構想は、当時の日本の対外進出と富国強兵の願望を、自由で積極的な貿易活動という国民経済的な問題関心に結びつけたものであった。そのころの平戸藩出身の青年たちのあいだには、熊本藩、佐賀藩など九州諸藩出身者に相通ずる国権主義的な対外進出論を唱え、やがて大陸浪人などになっていった者たちがあり、菅沼の友人の浦敬一、稲垣満次郎などはそうした人物であった。背は低い、がちりとした身体で剣道も強い菅沼は、やはりおなじような国士型の人物であった。明治二十一年十一月に高等商業学校の「雇」となった菅沼が、おそらく数ヶ月ほどで退職し、二十二年四月に福本日南とともにフィリッピンにむかったのは、彼らに特有の国権主義的な南進論の実践のためであった。しかし、菅沼は、同年七月、マニラでコレラのため急死した。菅沼は、高等商業学校在勤の期間が短く、その教壇に立つこともなかったかと思われるが、日本商業史の最初の体系化が、こうした国権主義的な問題意識と精力的な史料探索の交錯するところに成立したということは、留意しておいてよいことであろう。

ところで、『高等商業学校一覽』所載の明治二十三年度の「本科学科課程表」の学科目に「商業地理歴史」があり、その内容はさらに「内外国」と記されているから、この年度あるいは『高等商業学校一覽』が欠号になっているその前年度ごろから、日本商業史の講義が開設されたものと考えられる。二十四年以降の職員名簿には、

「商業歴史」担当教官として和田垣謙三と横井時冬が記されているが、非常勤の和田垣がヨーロッパを中心とした外国の商業史を、横井が日本商業史を担当したのであろう。

横井は、安政六年、尾張藩士の子として名古屋に生れ、幼名を弥曾次郎といった。藩校明倫堂に学んだあと、岡田小次郎、佐藤楚材、角田春策などに和漢学を学んだ。さらに、愛知県養成学校（師範学校）をへて東京専門学校に学び、明治二十年に法律学科および兼修英学科を卒業したが、その間にまた小中村清矩、本居豊顕、栗田寛などに師事した。そして、前述のように、二十一年十一月に土子、菅沼とともに内国商業史取調べのために高等商業学校の「雇」となった。そのさい菅沼の月俸三十円にたいし、六歳も年長の横井が二十五円だったのは、出身学校による待遇の相違であつたらう。しかし、横井は、土子、菅沼が去つたあと、日本商業史の研究を独力ですすめ、講義を担当した。二十九年に従来の「商業歴史」が「商工歴史」に改められると、日本工業史もあわせて講義した。その内容は、たとえば二十九年の「教授要旨」では、

商工歴史 第三学年

一、内国。商業起源、内地商業、外国貿易、貨幣、度量權衡、金融事情、内地交通、航海業、鋳山業、外国輸出品、開港及条約、上古時代ノ工業、寧楽時代ノ工業、鎌倉時代ノ工業、東山時代ノ工業、桃山時代ノ工業、江戸時代ノ工業、維新後ノ工業

となつている。

横井の主著『日本商業史』（明治三十一年）と『日本工業史』（同年）は、右の講義に照応しており、高等商業教育における教科書としてひろく用いられることを期待したものであつた。『日本商業史』は、菅沼の『大日本

商業史』が貿易を中心として鎖国で筆を止めているのになら、古代から維新後までを時代順に六編にわけ、はるかにバランスよく叙述しているが、江戸時代と維新後に多くの頁をあてている。江戸時代のばあいでは、たとえば城下町の商業、藩札、菱垣廻船と樽廻船、米・金銀銭相場、江州・越中の行商人などもそれぞれの章にまとめられているほか、蝦夷の商業や琉球の商業を記した章も設けられている。対外貿易にもそれにふさわしい位置が与えられているが、重点は内国商業とそれにかかわる制度や機構の展開などを具体的にとらえて秩序づけることにあり、高等商業教育に意義ありと考えられる歴史の側からの実的な知識を豊富にもりこんだものであった。『日本工業史』も時代順に六編にわけて日本の工業の展開をまとめているが、『日本商業史』よりもいっそう大きな重点を江戸時代と維新後におき、それぞれの工業部門毎に目くばりのよく効いたとらえ方をしている。江戸時代では、陶磁器業や織物業に多くの頁が割かれ、維新以降については、広義の織物業関係にもっと多くの頁をあて、「造船并に機械製造業」の章をわずか五頁ですませているのは、日本の工業生産の実情に照応した記述として当然のことではあったが、また一面では、高等商業学校の学生に将来の職業生活に有益な実的な知識を与えるという目的にもよることであつたらう。

横井の著作は、右のほか、『大日本不動産法沿革史』（明治二十一年）『園芸考』（二十二年）『商人鏡』（二十六年）『工芸鏡』（二十七年）『日本絵画史』（三十四年）『芸窓襍載』（三十七年）『大日本能書伝』（三十九年）などで、ほかに『帝国商業史講義録』（二十六年）等の教科書類がある。そのうちとくに注目すべきものは、土地についての権利、売買、典質、裁判などについての法制史的研究である『大日本不動産法沿革史』と、考証的な小論文を集めた『芸窓襍載』であらう。また、本学附属図書館に貴重書として収められている毛筆書きの小論文

『瀬戸陶器考』『徳政考』『屋号考』『札差考』『為替考』『白糸割符考』は、『瀬戸陶器考』のほかは『芸窓襍載』所収の同名の論文とほぼ同一の内容であるが、これらはいずれも明治二十五年以前に書かれているから、『日本商業史』と『日本工業史』は、これらのモノグラフィをふまえて成立したわけである。高等商業学校在勤時代の横井が、国内各地にしばしば出張しているのも、商業史・工業史の調査のためであった。

横井の歴史的関心は、作庭、茶道、書道、絵画などにも及ぶ広範囲なものであったが、その主要な関心事が広義の経済史ないし産業史にあったことは明らかなのであろう。いうまでもないことだが、横井には、社会構造や階級関係のような概念はなく、商業史や工業史の個別の歴史現象を、農業生産をも含めた包括的な経済構造のなかでとらえてゆくような発想にも乏しかった。横井の得意としたのは、右に本学所蔵貴重書中の論文名で記したようなそれぞれの時代に顕著だった経済現象についての個別的な考証であり、この点では、横井の関心はひろく、ほとんど日本商業史の全領域にわたっていた。そして、その考証の手法は根本史料を博搜した手堅いもので、『日本商業史』と『日本工業史』は、こうした手法で得られた認識を一つの系統づけられた全体像へとまとめた実際の知識の集成であった。横井は、明治三十九年、四十七歳で死んだが、学者としては多産で、その生涯を通して一つのあたらしい学問領域を定立させたと評してよい人生であった。

(安丸良夫)

二一

川上多助は、大正九年から昭和二七年までの三十余年にわたって、戦前・戦中は東京商科大学予科・本科の教授、戦後は大学講師及び嘱託として、日本史・東洋史・日本経済史を担当した。幸田成友は、大正十一年から昭

和十五年まで、本科教授として、日本経済史を担当した。

この間、とくに、昭和初年においては、兩氏の他に、日本史関係だけでも、滝本誠一・小野武夫・滝川政次郎・猪谷善一らの諸氏があいついで開講しており、商大の歴史教育・研究の開花期ともいえるべき画期をなしていた。そこには、幾つかの学問の流れがあり、それぞれに、潤達な研究・教育をくりひろげていたが、その中にある、増田四郎の表現を借りれば、「なまの史料から操作をおしすすめるという具体的な研究方法」をもった「著実敦厚な学風」を、商大に定着させ、発展させたのは、川上・幸田兩氏であった。

もともと、その論文集『日本古代社会史の研究』（昭和二二年 河出書房）に集められた諸論文にみられるように日本古代社会経済史の研究者であった川上は、それにとどまることなく「戦国時代の武家知行法」（史学七ノ二 昭和三年）、「荻生徂徠」（世界思潮五 昭和四年）などの論文が示すような、日本史の全歴史時代を視野の中にいれた歴史研究を行った。そしてその成果は、氏の代表作ともいえるべき『日本歴史概説』上・下（岩波書店 昭和十二・十五年）に結実したといつてよい。古代から現代（この書では明治時代）に至る通史であるこの書は、戦前に書かれた概説書の代表的なものの一つであった。それは、「目下我國內外の形勢は、國民をして國家に對する自覺を喚起せしむるもの多く、非常時を説き日本精神を強調する聲愈盛である。併し日本精神の眞義を解釋せんとすれば、個人的の偏見先入主を去り、直に國史の成跡について考察するのが最も必要であり、祖國の歴史は國民思想の源泉である」という観点で書き貫かれている。

同じ実証史学の流れに属するといつても、幸田は川上と違う味わいをもっていた。それは、幸田史学ともいえる特徴をもっている。幸田の、最初の学術的著書と思われるのが、昭和三年に出された『日本経済史研究』（大

岡山書店」と『讀史餘録』（同上）である。後者は、彼のそれまでの史伝や書誌についての比較的短い論文を集めたものであるが、前者は、江戸と大坂とを主題とした、江戸時代の經濟史論文集であった。この二つの書の内容と、この二つの書が刊行された年末には、すでに、幸田は文部省海外研修生として、遠くオランダのヘーグにいたという事実とは、幸田史学の諸側面を示していると思われる。

幸田は、『凡人の半生』（共立書房 昭和二三年）で自ら語っている。

然し自分は最初から歴史を勉強する積りであった。（中略）大学で国史料に入らずに、史学科を選んだのは、何の為かと問はるれば、これは返事が出来る。従来の日本歴史は研究方法も著述法も全て支那を手本としている。欧州の新しい研究方法によって、これを補う所はないか、出来る事なら一度は欧州に留学して、史料の保管及び使用の実際を目撃したいといふ野心を抱いて居たからで、その野心は幾度か蹉跌し、三十余年後の昭和三年に至って成就しようとは、自分の夢にも思はなかつた所である（一高生時代下）

こうしてえらんだ帝国大学文科史学科も、彼の意に、必らずしも添うものではなかつた。平安朝から織田氏勃興まで、また徳川時代の中期以後については、皆目知る所なくして学校を出る（帝大学生時代）

これらの幸田自身の記述の中に、幸田史学の動機や方向を見出すことができるであろう。そして、その史学研究は、やがて、『江戸と大坂』（富山房 昭和九年）に代表される江戸時代都市經濟史、『日歐通交史』（岩波書店 昭和十七年）に結実する外交史、『改訂増補大塩平八郎』（創元社 昭和十八年）を代表作とする史伝・伝記、『江戸時代初期の分類目録』『江戸時代の書目』（三色旗二九・二八 昭和二五年）などの書誌学、のすぐれた成

果を生み出したのであった。

しかし、幸田が史学科の出身であったこと、および、明治二九年の卒業から同三四年にかけて、大阪市史編纂主任となる間に、マッケンジー『十九世紀史』の翻訳（同二九年）、『中学教程東洋歴史』の校訂（同三〇年）、『外国地理』の共編（同三二年）『歴山大王』（博文館 同三三年）『東洋歴史』（博文館 同三五年）、『西洋史講義』（吉川弘文館 同三五年）の著述などをしていたこと、講義の最初に「語学は大丈夫かね、語学がでなくては日本史は勉強できないよ」と言ったというエピソード、などは、幸田史学を理解するために、不可欠なことかもしれない。

地方史誌の代表として、研究史の上でも評価の高い『大阪市史』第一―第五（大阪市参事会編 明治四四―大正三年）の編纂を終えた幸田は、その後「明治天皇記」の編纂に従い、ついで、大正九年慶応義塾大学塾員、同十一年東京商科大学予科教授兼同大学助教教授となった。商大での講義は、大正十三年から始められたが、その講義題目は「江戸と大阪」であった。その講義案を著書にまとめるにさいし、幸田は次のように言っている。

自分は大正十三年度以来、東京商科大学において「日本経済史」の講義を担当した。自分の研究の為と学生諸君の聴講の便とを併せ慮って、毎年新しい講義案を作ったので今日ではそれが相応の分量に達した。（中略）

「江戸と大阪」は、自分が商科大学における最初の講義であり、又最後の講義である。大正十三年度に一回講演したままで二度と繰り返し返した事は無い。従って自分にとって少なからざる思出を伴うこの講義案が津田増田両学士の尽力によって一冊の本にまとまったと思えば両氏に対する感謝の念は禁じ難い。（序文）

五一才の幸田が、この講義にかけた思いが、生き生きと伝わってくる。そして同時に、この文章は、この二つ

の大学で、秀れた学生たちが、研究者として、幸田に師事していた有様をも物語っている。さきにあげた『日本経済史研究』は増田四郎・吉田小五郎が校正その他を、『日欧通交史』は林基が原稿の整理を、『江戸と大阪』は津田礼二郎・増田四郎が浄書などを、それぞれ手伝っていた。高橋嶺一は、少年向きの本のための原稿を幸田から渡され、単行本にするようにまとめるよう委されたが、召集令のため実現できなかったという。これらの人たちは、それぞれに、幸田の仕事に関わることを通じて、研究者としての成長を遂げていった。商大の増田、慶応の吉田・林・高橋のこれらの人たちの歴史学は、それぞれに大きく違う。しかし、その違いを越えた何か共通のものを、彼らは幸田から学びとったように思えてならない。学風とはそのようなものをいうのであろうか。

幸田から何を学びとったかについては、増田四郎が、幸田にたいする敬愛をこめて書いている（『日本の歴史家』日本評論社一九七六年）。また、学生にたいする指導ぶりについては、林・高橋らの他に、商大を出て実業界で活躍した柿原謙一が、美しい文章を書いている。幸田のゼミは、毎年二―三人の小さなゼミであったが、毎週、上荻窪の幸田の書斎で行われ、そのさいに示された古文書の数々やその取り扱い方についての教示と、夫人が御馳走して下さった、緑茶・紅茶の味が忘れられないと。

商大での幸田は、昭和九年、停年退職してのち、同十五年まで、講師として、講義をうけもった。各年の講義題目は、「貨幣」・「米」・「外国貿易」であった。そして、この約二十年にわたって、幸田が、商大を足場にして活躍した証しとして、一橋大学図書館には、礼差関係史料の他、幾つかの史料が残されている。増田を代表とした礼差事略刊行委員会が、昭和四〇年に刊行した『礼差事略』全三卷（創文社）は、その史料の一部であるが、それは、一橋大学で歴史研究・教育に携わるものの、幸田にたいする報恩の表現でもあった。

学者としての幸田をその仕事からみると、まず、その実証密度の濃さをあげなくてはならない。幸田は、自分が内閣文庫の史料を見ることが出来る立場にいないことを、再三嘆いているが、それが、幸田の仕事の決定的な疵になっているとは思えない。旧幕引継文書を中心とする文書蒐録と、『大阪市史』編纂に当って収集した史料とは、幸田の仕事の基礎であったともいえる。それらの史料によるその仕事の実証密度の濃さは、幸田の全ての仕事についていえるのであるけれども、例えば、『大塩平八郎』がそうである。この書は最初、明治四三年に東西堂から出された。そして、三〇年余後の昭和十七年に増訂され、翌十八年に改訂増補されて完成した。戦後、現在に至るまで、大塩平八郎は、さまざまな形でとりあげられてきているが、そして、その意義については、いろいろの解釈が試みられてきているが、大塩平八郎その人にかかわる史実については、この幸田の改訂増補本以上に出るものはないといつてよいだろう。まさに、実証史学の先駆者な仕事としての輝きをはなっている。

このような実証密度の高さは、しかし、たんに、研究のレベルの問題として片づけられるものではない。そこには、物事にたいする、個別的なものにたいする、尽きない愛情がある。その愛惜の情が、研究対象を江戸時代にとったことよって、みごとに発露されたのが、幸田史学であった。幸田は、明治六年、幕府に仕える坊主衆（禄高四〇俵三人扶持という下級幕臣）であった成延の四男（幸田は、実際は五男だと自分で主張している）として、東京神田山本町に生まれた。幸田家は二〇〇年余も江戸にあった家で、幸田は、

自分は明治の世に生まれ、東京で生長したことを、大きな幸福と考えてゐる（凡人の半生）

と言っている。この、いわば、生粋の江戸っ子であった幸田が、長ずるにおよんで、おそらくは、『大阪市史』での体験をもふまえながら、彫りの深い研究者に成長していったのであろう。高橋碩一は、うまいことを言って

いる。

先生は、「江戸ッ子」というより「江戸人士」の最後のタイプとでもいうひとであったろう。東京を「トウケイ」といわれたのが、今も耳に残っている。

時代としての江戸を知り、時代としての江戸に限りない愛情をもっていることは、幸田にとって、もともとのことであった。その意味では、江戸を語りうる資質をもった歴史学者の、数少ない一人だったのである。

そして、幸田は昭和二九年の、その死去まで、まさに、そのような「江戸人士」として、前に述べたように、日本史学改革の熱意を胸に秘めながら、時代としての江戸をとらえ、具体的であるが故に、生き生きと、しかも尽きせぬ愛着をもって描きだすことに、努め通したのであった。

史
本

注、本稿は、幸田・川上の著書論文の他に、

増田四郎「幸田成友」(『日本の歴史家』日本評論社 一九七六年)

日 『幸田成友著作集』月報1〜6 (中央公論社一九七二〜七二年)に負っているところ尠くないことを付記する。

(佐々木潤之介)

三

幸田成友・川上多助の両硯学によって担われた商大時代の日本史研究は、新制一橋大学に入って一つの断絶を迎える。その最大の理由は優れた後継者を得られなかったためである。幸田の下で一時、日本史研究に従事していた増田四郎教授はやがてヨーロッパ中世史研究へ研究対象を移し、のちにドイツ中世史の大家となっていた。また村松恒一郎教授のゼミから出た及川完は日本経済史の後継者として川上多助の指導の下に研鑽をつみ、

将来を嘱望されていたが、今次の大戦の犠牲者となって不帰の人となった。及川の最後の応召は、昭和二十年二月二十七日であり、そのとき彼は東京商大助教教授であった。及川の生死も判らないため一橋大学としては、彼のために日本経済史のポストを開けていたようである。しかし、昭和三十四年七月、彼の死亡が確認された。昭和二十二年四月十日、ソ連イルクーツク州チェレンホーヴォ地区ジマ病院で戦病死という悲報が大学に届けられたのである。

この間（昭和二七〜三二年）日本経済史の講義は中世史家として知られる東北大学の豊田武教授が兼任教授として担当した。だが、日本史専攻の大学院生は一人もなく、後継者の養成問題は一つのデット・ロックにあったと言つてよい。

増淵龍夫・渡辺金一両教授は『一橋学問の伝統と反省』（創立八十周年記念、一九五五年刊行）の中で、その頃の事情を次のように記している。

「両碩学（幸田・川上―注）によつて一橋の土壌にまかれた日本史研究の種は、今日の現状においては、不幸にして未だ、十分な発育を見ない。」「私達の先輩は、一橋における日本経済史研究の育成に對して多くの関心と努力を払われて来たのであるが、その関心と努力は、不幸にして、その後十分な結果を見ないで、今日に至つた。」（同一四九頁）。

及川助教教授の死亡が確実視され、豊田教授も兼任教授を辞したため大学は昭和三十三年から東京大学史料編纂所の永原慶二教授を経済学部の専任教官として迎え入れた。また同三五年には東京大学農学部の古島敏雄教授が兼任教授となった。この両教授の指導の下で、幾人もの日本経済史研究者が育つていく。その第一号が中村政則

である。その中村ゼミからすでに十名をこす近代日本経済史の専門家が出ていることを考えると隔世の感を禁じえない。古島・永原両教授のまいた種は、開花し、確実に根を下しているといつてよからう。

また、社会学部の日本史関係者の充実ぶりにも特筆すべきものがある。まず、昭和三六年に佐々木潤之介（社会史・日本）、四二年に藤原彰（政治学）、四五年に安丸良夫（社会史・日本）の三教授いあいついで着任し、研究・教育体制は飛躍的に向上した。この三教授の下で指導をうけて巣立っていった研究者や大学院生もすでに多数にのぼっており、昭和五四年には田崎宣義が社会史（日本）の担当者として社会学部助教授に就任した。ついで昭和五八年には西成田豊が現代経済史の担当者として竜谷大学から呼び戻され、経済学部助教授となった。

この四半世紀における本学の日本史研究は一つの時代を画するほどの発展を示したといつてよい。しかし次の四半世紀には現在の教授陣は確実に一新される。次の時代を担う後継者の養成がまた大きな課題となりそうである。

（中村政則）